

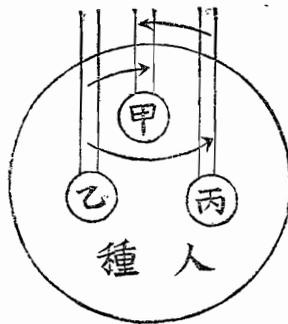
言語を説明資料とすること (承前)

藤岡勝 二

然らば言語は人種に即かないものか、言語と人種とはどこまでも離れるものかといふのに、その答としては、兩者互に離れるものと云はなければなりません。それでは、ぐつ付くのは、どうしてぐつ付くか、どうして人種と云ふものと言語と云ふものがぐつ付いて來るかと云ふと、人種と言語とぐつ付くと思ふのがそもぐ誤りであります。是は細かに言はなければなりません。言語がぐつ付く所は人種にぐつ付くのではない、社會にぐつ付くのであります。厳しく言ひますれば、一個の人間にぐつ付くと云ふのも、又、さう思ふことも既に誤りであるかも知れぬので、即ち之を言換へれば、言語はどうしても社會に即くものであるのであります。即ち日本語は日本人の社會、日本人の團體に即いたものなるが故に日本語であつて一個の人に即いても、それは日本語でも何でもありません。又、日本の社會に即いたから、日本語であると云ふやうに、言語が言語として生きるのは社會に即いてのことである、一個の人間に即てのことでないのであります。と申しますと、即ち語が語として生命を有つのは一個の人間に依つてもなく、人種に依つてもなく、社會の上で生命が出来るのであります。故に語が行はれて行くと云ふ

のは社會の上に行はれて行くのであつて言語が亡びて行くと言ふのは社會の上に亡びて行くと言ふこと
であります。之を言換へれば、國の上に行はれて行くとか、國の上に亡びて行くと言ふても宜いかも知
れませぬが、併しそこには少々差支が出て來ます。何故ならば、國を失つた或團體が、他の言語領内に
移ても、尙其元の言語を有つて居ることが屢々あるからであつて、この場合には即ち團體のある所に言
語があるのであつて、國と云ふ形の有る無しには關係がないといふことが甚だ明かにわかります。故に何
處までも嚴密に言ひますれば、言語の生命は社會の上にあると言ふて置かなければならぬのであります。
さうすると言語と云ふものは社會に即いて來るものである、決して人間といふ一個のものに必然のもの
でなく、自然のものでない。さういへば、他の動物に言語がなくて、人間にのみあるのを見ると、言語
は人間といふ一個のものに起るものといはねばならぬかと、云ふものがあるかもしれませぬが、言語の
起るのは人間に在るのではあるけれども、一個の人間の上には起るのでなく、どうしても、その人間の
社會生活といふことが之を起させる甚だおもひ縁になるのであるとせねばならぬ。故に社會といふこと
をこゝに力説するのであります。團體の上にも即いて來れば如何なる言語でも生きることが出来るのであ
ります。かくて言語は甲の社會乙の社會丙の社會とそれ／＼の上に即いて甲、乙、丙の言語と稱せられ
行はれていくのであります。乃ち國として之を云へば種々の國語が出来る所以であつて、一國內に於て
之を云へば種々の方言が出来る所以に相當する。即ち各の社會に各の言語が出來て行くのであります。

其各社會はやはり段々歴史を經るに隨て成長して行く。成長して行く間に他の社會との關係が付いて來る、他の社會との關係が付いて來る爲に、他の言語との關係が付いて來る。そこで非常に複雑な現象を生じて來るので、其成行きを見分ける點に於て屢々見解もちがひ誤りも起るのであります。つまり社會が甲乙丙とある。それでどこまでも、全く、孤立しては居ないで、段々歴史的に發達もし空間的にも他



と交つて行く。その間に甲と乙との關係が付き、或は丙と乙との關係が付く。さう云ふことがあるから朝鮮語が日本語に入ることもあり、支那語が日本語に入ることもある。交渉がますます複雑になるのであります。この有様が同一人種内でも生じ、又、異なる人種の間にも起つて言語は無限に人交つて來るのであります。

さう云ふことになりまますから、社會と社會とが互に觸れ合ふと——昔は人と人と觸れ合と云ふやうに説明して居つたが、それではまづいやうです。社會と社會と觸れ合ふと、——どうしても言語的交渉が起る。さうして其交渉の極端に起つた場合には一方の言語が一方の言語の爲に亡ぼされるといふことも起ります。之を吾々は言語戦争と申します。各社會に行はれる此言語戦争は常に行はれて居て、一方が一方を奪取つて了はない限りは、戦争の狀況が目立つては分りませぬ。しかし、奪つて了ふと、非常に目立つたものになりますのであります。其奪つて了つた例を申しますと、是に

は種々の場合があります。第一は兩社會の文明の程度が同等位である時で、この時、其兩社會の言語が互に衝突すると、その使用者数の多い方が勝ちます。是は申すまでもないことで、同じ文明程度のものが打付かるなら使用者数の多い方のものが勝つのは不思議はありません。所がなか／＼同程度の文明と云ふことはむづかしいもので、幾らか差があるものであります。そこで差のある場合を考へる方が實例に適ひます。差のある場合にはどう云ふ結果になるかと云ふと、是は申すまでもなく、文明の程度の高い方の言語が勝ちます。そこで民族が大侵入をした場合を見ますと、この證明になるものがあります。

例へば、昔蒙古の軍が歐羅巴へ侵入して随分廣い地面を蹂躪した譯でありますが、あの時の蒙古の軍隊が歐羅巴に、どの位言語を遺したかと云ふと、實に僅かである、甚だ僅かしか認められないのであります。さうすると、此場合はどといふわけになるかといふのに、あの多數の者が入込んで行つたが、又、侵入者ではあつたが、何分文明の程度からいくと、蒙古の方が低かつたからしかたがありません。數は多くても干戈に勝つても言語戦争の勝利を得ることは出来なかつたのであります。尙、それと同じ例を申しますと、昔ノルマンが佛蘭西に入つてノルマンヂイで大なる勝利を得た。けれどもノルマンの方が文明が下であつたから、ノルマン語は遂に佛蘭西内地に於て非常に弱くなつて、佛蘭西化されて了つた。佛蘭西を経てノルマンが英吉利に入つた頃も、やはり其通りで、英吉利に於て十分ノルマン語を發揮することが出来なかつた。やはり佛蘭西化されたノルマン語になつたり英國化されて了つたのであります。モツ

ト適例を申しますと、支那の歷朝中に全く同じやうなことがあります。支那の歷朝中には隨分北方の夷が中國に入つて來て居る。中には餘程南まで來た者もある。元の忽必烈の時などにはなか／＼南方まで勢力を及ぼした。しかし蒙古語は遺らなかつた。金の時はどうかと云ふと、金は北方に片寄つて居たけれどもともかく、中國に力を及ぼしさうな金の語も實に僅かしか遺さない。滿洲清朝はどうであつたかこれはことに支那全土を風靡して大なる勢力を振つたものであります。而も乾隆帝とか康熙帝とかと云ふ努力家であつて、何でもかでも、滿洲流義を支那全土に及ぼさうとして、言語の如きも非常に之を擴げること努めたものである。支那に從來傳つて居る所の四書五經の如き、其他一切有力なる文學、わけて國民が好んで読みさうな小説などは、之を滿洲語に翻譯して、殊に名門の子弟には滿洲語を學ばしむるやうに學校を建て、之に入れさせた。八旗の兵は御覽の如く必ず之を學ばなければならぬと云ふので、大いに獎勵した。かくまで非常な努力をしたけれども、遂に滿洲語は支那の通用語として行はれしめることが出来なかつた。漸く宮中の一隅に用ひられて居つたに過ぎないのであります。それも外臣に對する時に勉めて滿洲語が我國語であると云ふことを示して居られた迄であつて、實はやはり支那語を用ひて居つたといふことであります。それを見ますと、あれ程支那全土を征服する程の勢を以てしても滿洲語は遂に支那語に勝つことが出来なかつたのであります。即ち政治上の戰爭には勝つても言語上の戰爭には負けたのであります。それは何かと云へば、あの國に入込むと、直に多く支那の文明に據つて

了つたからであります。これは蓋し止むを得ないので、何といつても中土の文明の方が高かつたから、直に之を學んだのであります。そこで最早言語で勝つことは出来なくなつた。是が即ち使用者の數が多くてもやはり、文明の優れて居る方の言語が勝を制すると云ふ理由によるのであります。

其反對に、數が少くても文明の程度が進んで居ればその言語は偉い勢力を及ぼします。今の獨逸の聯邦の盟主になつて居る所の普魯西はもとゞ土地としては獨逸語のところではありませぬ。吾々の専門語で普魯西語と云ふものは獨逸語系に屬するものではなくて、露西亞語と同系統の言語であります。獨逸語の中に入れませぬ。其位で、普魯西と云ふ所は元は露西亞語系統即ちスラヴ語の行はれて居つた所であります。尙、其土地には獨逸人は僅かしか居らず獨逸語は僅かしか聞えなかつたのであります。併ながら十七世紀の末に元のそのスラヴ語は全度亡びて了つた、即ち普魯西語と云ひ來つたものは死語となつて、人の口に生きて居る語ではなかつたのであります。實にひどいものでありまして、僅かの間に獨逸人が用ひてゐた獨逸語の方が普魯西を壓倒して了つたのであります。これに就て、面白い話があります。一千四百年の時に、普魯西で、詩人が、普魯西の昔の英雄談を詩に作つて聞かせたら、嘸皆が感動するだらうと思つて、骨を折つて、それを昔の普魯西語に作つて謠つて見た所が、誰も感心するものがない。少しも分らない。分らないどころではない、其御禮として何を寄越したかと云ふと、「果物の皮」と書いてありますが、何か果物の固い所でありませう、——そんな物を百寄越した。それは何にな

るのか知りませぬが、御禮にそんな物を寄越したに過ぎない。其詩の値打と云ふものは彼等には頗る低いものであつたかと云ふことを證明するに足ると云ふことがありますが、その頃もう其位に分らなかつたものなどであります。さうして十七世紀即ち一千六百八十年かには最早それは亡びて了つた。是は全く獨逸人の例の勢力の強い所以も無論入つて居りませうが、比較的文明の程度が相手のより高かつたからといはれるのであります。

斯様な工合で、どうしても文明が高くつて努力をしようと言語戦争には勝つて行くものであります。これには無論例外のないことはありません。たとへば氣候が非常に違つた場合などには例外が生じます。グリーンランドは極めて寒い所で、エスキモーの居る所でありますが、彼處へは屢々スカンデナヴィアの人が移住しました。餘程古くから度々行つたがどうも成功しない、無論スカンデナヴィアの言語は行はれない、終に失敗に終つて了つた。どうしてかと云ふと、スカンデナヴィア人ではどうしてもエスキモーの通りの生活が出来ない。生活が出来ないから體が保ちませぬのみならず、文明を向ふへ移し植ゑることが出来ない。又、エスキモーの方では氣候の關係上どうしても、エスキモー流でなければ生活が出来ないのであるから、丁抹人や諾威人の生活の法を持込んでとても行はれない。従てその言語も行はれない。何でも餘程長い間、三四百年掛つて何遍も北方の歐羅巴人が入つたのであります。一向言語上の影響が薄い。最後にどう云ふ語が残つたと云ふと、女と云ふ語が残つただけであります。どうも

可笑しなことで女と云ふ語だけが残つたのはどう云ふわけかと云ふと、詰り大抵は死んでしまふので、女は生き残つた部に入つたからそれを表す其語が残つたのであるといふのであります。是はどこまで精しく調べた報告が分りませぬけれども、そんなことが云つてあります、これに由て見ると、氣候が非常に違ふと、高い方の文明でもなかく之を施す爲に勢力を用ひることが充分出来ぬので言語も亦力を及ぼし難いものであります。併ながらかく云へばとて、到底この場合に文明が扶植出来ないとはいへないので、たとへ氣候が如何に違つても、眞に文明が高くて、人力が振へるなら、やはり之を懐けることは出来るのであります。何故ならば、其土地へ入つて、どんなに暑くつても、どんなに寒くつても、其處に適するやうなことを學術的に考へさへすれば、之に打勝つて苦痛を除くことが出来るものであります。即ち獨逸人がカロン島に入つて、あの附近の島を占領してから、其處へ獨逸語を布いた努力と云ふものは尋常でない、獨逸の文明を布くと共に獨逸語を教へるに付ては非常に骨を折つた。そして皆成功して居ります。故に随分氣候は違つても本當の文明人ならば學術的に之に處する途を講じますからそれに依て文明を布くことが出来、隨て言語を用ひしむることが出来るのであります。

斯様な譯で、その社會の文明とか或は言語使用者の數とか——主として文明であります、——さう云ふことが本になつて言語戦争の勝利は其の強い方に行くのであります。南米の諸國が南歐の言語を用ひるやうになつたのも、やはり其例とすることが出来ます。此等は皆其社會員が其儘であつて、他から

言語が入つて来て、在來の言語を驅逐した例になるのであります。其反對の言語は元の儘であつて、さうして社會員が變つて了ふと云ふことがあるかと云ふと、それは有り得ない、それは考へることは出ぬのであります。併し、前にもチョット申しましたが、言語を維持して居りながら、國が亡びると云ふことはあります。即ちこれは國としての重要なところを存していくことが出来なくなつて、言語を携へながら、其社會が他へ動いて了はなければならぬことになつたものであります。其立派な例は猶太人にあります。猶太人は、其社會は、尙猶太人社會として何れの國に行つても保つて居ります。又言語も保つて居りますが、國は無いのであります。即ちこゝを以て見ても、前に申しました通り、言語は社會に即いて居ると云ふことが重きをなすといふ證據になるのであります。

此等は皆國若くは社會と言語とを土臺として、其の言語を失ふか保存して行くか、といふ存亡の場合を御話したのであります。其他日々行はれて居る社會言語の關係は言語が互に借入せられることでもあります。言ひかへれば、此社會が互に言語を融通し合ふことであります。是はモウ分りきつたことでありまして、殊更にこゝで申上げる程ではないだらうと思ひます。昔から既に我國には支那語が澤山度々に入つて來て居る。或時は吳音、漢音と云ふやうな形を有つたる支那語が入り、或時は所謂唐音と稱するもので入つて居ます。此唐音と云て居るのは實は宋音で、宋音でよぶ支那語が入つたのであります。禪宗の語などにはこの宋音で入つたのが大分あります。這裡、恁麼、葛藤、下堂、竹篋などはそれであ

ります。禪宗の語のみならず、日常の言語もいくらかこれから出来てゐます。杏子、蒲團、饅頭、普請、老婆心切、擲揄など宋語がもとであります。それから後に明になり、又、清になつて、即ち明朝清朝それ／＼の時代の言語が我國に入つて來て居ります。日常吾々の周圍を見ますと、支那語に依て言表されて居るものが非常に多い。中には氣の付かぬものもありますけども、所謂漢語と云ふもの、外の支那語で言ひ表されて居るものが尠くないのであります。是は皆平和の間にだん／＼はいたものであります。支那の語は申すまでもありませんが、その前に朝鮮語、後に西洋の語もなかく／＼はいつてゐます。ことに近世に至つて、交通が開けましたに従つて／＼西洋の語が澤山我國へ入つた。是は我國で翻譯の出来るものならば翻譯したのでありませうけれども、一體他國の語が入ると云ふのは多くは已むを得ざるに出づることが多いのでありますから、とかく譯しなほすことは、日常語の上には、おこることが少いものです。例へば、今「タオル」と言つて居るあれを西洋手拭と言つたこともある。又今も言つてゐる人もある、けれども「西洋手拭」と言つてもどうも日本の手拭と並べて見ると餘り類似はない。使用法は類似して居るかも知れぬけれども大分違ふ所がある。殊に頗る大きなものになると、どうも西洋手拭では少し當らない所がある。と云ふやうな所から、明確にそのものゝ觀念を表す爲に語を使はうとすると、翻譯するより、寧ろ元の儘が都合が好いことになる。即ちそこに已むを得ざるものがあつて其儘入るのであります。「洋服」と云ふ語の如く翻譯がうまく出来上つてしまへば宜しいけれども、翻譯が旨く出来ないとか

て觀念を表すのに不都合であるから、其儘表すことが多いのであります。日本の「人力車」と、いふ語が西洋に入つたのも亦同じわけであります。西洋で人が曳いて走る例がないものですから、よくあたる譯が出来ない、已むを得ないので、日本語のまゝを入れたのであります。

かやうにして日常交通の間に互に語の借入がある、其事を非常に痛嘆する者があります。大に國語を重んずる人は、外國語が多く入ることは、我國語を汚すものである、國語の値打を下げるのである、隨て國としての恥であると云ふやうなことを申します。是は一應尤であります。出來得るならば立派な翻譯をするが、最も分り易い古い語を復活するか、どうかして他國の語を其儘用ひるやうなことのないやうにしたのであります。併ながら、今申す通り、觀念に確實に當るやうにするには容易でない。容易でないから何時でも手取り早く他國語を其儘用ひるのであります。是はやはり已むを得ざる所があるのであります。それが果して我國語を傷けるか、果して我國民精神にまで影響するかと云ふことを問ひ詰めて見ますと、いろ／＼な語がまじり込むことは大して國語の精神に影響の及ばないものであらうと思ひます。今度の戦争が始まりまして、露西亞がサントペトルブルグを改めて、ペトログラードとしたとか云ふ如く。又、獨逸人が近頃骨を折つて佛蘭西語を排斥しやうとして居る如く、いろ／＼細かいことをするのも、國民精神の統一を圖る上に於て良い方便の一つではありませうけれども、それを貽して置くから國語の精神が傷けられると云ふほどのものではないのであります。此際敵國のものを斥ける

敵國のものには語でも之を亡ぼす勢を見せるといふ、その點に値打がありませうけれども、それはいはゞ消極的方法で、國民の統一に對する唯一の積極方法とはなりませぬ。少くともロシアでその效は擧りませぬ。他國語が必ずしも國語の精神を傷けることが大きいと云へない立派な證據は過去の我國を見ればわかります。我國には昔から實に無數の漢語が入つて居ます。又漢語に眞似て作つた日本製のものも決して尠くありません。其無數の漢語があつたけれども、今日までの歴史に於て、未だ甚しく國語は汚されて居らぬのであります。國民精神も、それに依て甚しく傷けられたとも思はれませぬ。水戸の學者などに於ては支那の文明を眞似ることを嫌つて、二十四箇條か擧げて、唐の文明を眞似ることは悉くないと云ふやうに論じた人もありますけれども、併ながら一面から考へれば、支那の文明が入つたが爲に、我文明が諄化して來たのでありますから、必しもその毒した方面ばかりを見ることは出來ないと思ひます。可なりに我文明が諄化し上つてから、いひたい事をいつても、おかしなもので、實際支那の文明によれて、それが結構である。それをもらはなければ、我はみす／＼劣るばかりになるといふ時代に於ては、こんなことを云ひませうが、益を認めることが切な場合にはいはぬでありませう。一體、人間が社會に在て互に交通すれば文明の交換のあることは當然である。文明の交換があれば、いろ／＼の分子が入ると云ふこともまた當然である。言語も無論はいるものであります。併ながら言語の上で茲に一つ冒すべからざるものがある。どう云ふものが冒すことの出來ぬものかといふのに、それはその國語

の組立に屬することでありませぬ。これが國語の精神と云ふことに屬すること、これは動かないものであります。それはどう云ふことかと云へば、たとへば、如何に支那語が我國に影響しても、「花を見る」と云ふ場合に、「見る」と云ふ語を先に言つて「花」を後にすると云ふことはどうしても起らない。支那語流ならば「見る」を先に言つて「花」を後に言はなければならぬのであるが、支那語が大いに影響した後に於ても我國語で「見る花」と云ふやうなことを言ふ氣遣ひは決してない。又英語もさう云ふ言方であるけれども、決してさう云ふ言方が我國語に入る氣遣ひはないのであります。其の他、國語の組立、精神に屬することが、いくつも數へられますが、要するに、さういふことは、幾ら他國語が入つても冒されないものであります。そこが犯されない以上、精神上にも大なる影響はありませぬ。即ち他國語のはいることは多くてもそれは割合に差支のないものであるといふのであります。

勿論日常交通の間に外國語がいろ／＼借入せられて來ることは成るべく避けたいのであります。たゞ已むを得ざる場合は其の言語を用ひることを許して置くのであります。唯自分の文明が他より來る文明に劣るが爲に、其の結果として國語の運命が衰へて來るやうなことがあつては一大事であります。そこで結局の所は、社會を中心とした文明の發達に最も力を盡すべきであつて、そこに十分力を入れて置いてさうして言語の問題の如きもやはりそれに伴つて講じて行くならば大なる憂はないこと、思ふのであります。さう云ふ方法で此國家社會の文明と言語とのことを考へて行くことすれば、現在のわが國の位置狀

態に於て十分努力すべきことが多々あるのです。過去の我先祖が希臘から来たか印度から来たか、さう云ふことよりはモット緊切な問題に従事する必要があります。他國の言語と我國の言語とを較べてひいて人種上の血族關係を論ずることが如何にも正當であるならば差支ないけれども、不正當であるのみならず、歴史を無視し、今日進んだ科學の補助を嫌つて單に言語のみしかも辭書上の語態のみに依つて種々のことを牽強附會して説き去つて了はふとするのは大なる早計でありますし、又世を誤るものであるのであります。それよりは、わが國現在の状態に察して、この言語をどういふ風に研き上げねばならぬかに骨を折る方が學者等の務であります。私は出來得るならば尙進んで國の消長と言語のはいり工合等のことを御話して見たいと思ひましたが、最早一時間になりますから是で御免を蒙ります(完)

